

近郊集落の市街化がもたらす屋敷神の地域への表出に関する研究
—東京都武蔵村山市を対象として—

A Study on Yashikigami, a Private Shrine Which is Coming out to the Suburb
Landscape as a Result of Urbanization in Neighboring Villages.

37216205 劉嘉林

Yashikigami, a small private shrine for the god of house or ancestor of the family, is a Japanese traditional religious place and it is distributed throughout Japan. Each of the Yashikigami has a small palace or a Tori and most of them were built during the Edo era with people's wishes for good harvest, health, prosperity and safety. Unlike other famous shrines or temples, Yashikigamies are privately owned by each family or a small community. They have various architectural styles, locations and deities to be worshipped. What is the point is Yashikigamies are personal things that even local governments cannot keep track of them. Also, Yashikigami seldom considered as a factor that should be paid respect in the context of urban planning throughout history because they are usually located on private property. As urbanization has progressed, the treatment of Yashikigami has also changed. They are no longer only kept inside the owner's garden, but they are seeing out to the public and becoming part of the superb scenery. Therefore, the aim of this paper is to track the treat of those Yashikigamies and figure out how Yashikigamies are standing among houses, having connection with pedestrian and blended into the landscape.

1. 研究の概要

1・1 本研究の目的と背景

本研究は東京都内の市街化したいきに取り残される屋敷神の様相を明らかにすることを目的としている。

まちなかで時折目に入る赤い鳥居や小さな祠は総じて屋敷神と呼ばれ、江戸時代を中心に日本全国に建てられるようになった私祭の神社であるが、その数は農地の減少と市街化の進行に合わせて減少の一途をたどり、現在では都心ではほとんど見られない。

しかしながら、都市近郊では市街化が進むものの、多摩や武蔵をはじめまだ多くの屋敷神がみられる地域もあり、そこでは人々の生活

においてコミュニティをつなぐ役割や、景観をぎわす役割を担っている様相がみられる。また、屋敷神に関連する地域の歴史や、その管理者に伝わる地域の小話など、「無個性」と言われることもある郊外の地域文化形成にも役立つ可能性があるため、このまま減少させてしまうには惜しい存在だ。

かつては社会学者の鈴木榮太郎氏ⁱ、民俗学者の柳田國男氏や直江廣治氏による社会学、宗教学、民俗学の観点からの全国的な研究も盛んにおこなわれた時期はあったものの、近年では屋敷神の数の減少とともにそれへの関心も少なくなっている。特に都市計画や都市景観の観点からの先行研究は僅少である。

Karin Ryu

それは屋敷神が基本的に個人所有のものであり、個人所有の敷地内に包含されるのが原則であつたためだろうが、土地所有の変化や街路拡張などの土地利用の変化によって、一部の屋敷神は街路脇に位置するようになり、一般の通行人にも景観の一部として認識できるようになった実態がある。よって、現代の特に昭和以降に市街化が進んだ地域において屋敷神がどのように地域に表出し景観と関わるようになったかを調査することは、今後の地域振興や景観デザインの観点から有益であると考えている。

1・2 研究対象の定義

先行研究を踏まえて、本論においては直江による定義を踏襲して、屋敷神を「屋敷の一隅やこれと接続した一小区割、もしくは、やや離れた持地の山林など、屋敷の付属地に祀られている神」とした。また、中でも特に「街路に露出する屋敷神」を研究対象とした。

本研究の目的に照らし合わせ、あくまで本来は個人の敷地に包含される屋敷神が時代の流れの中で市街に表出するする際の景観について研究するため、一般の通行人として見える範囲に観察される屋敷神に限定した。

1・3 先行研究と本研究の意義

鈴木榮太郎『屋敷神考』、柳田國男『祭日考』『氏神と氏子』、直江廣治『屋敷神の研究』をはじめとする先行研究では社会学や民俗学、宗教学の観点から屋敷神の来歴による分類、祭神、建材、所有者、供物などの屋敷神そのものに関する研究と、谷口貢の論文「稻荷信仰ⁱⁱと地域社会稻荷講」にみられるように屋敷神がつないだ地域コミュニティに関する研究が主だった。

屋敷神そのものの研究については立地や建築様式（ハード）と信仰面（ソフト）の研究、また屋敷神周辺への注目もコミュニティ（ソフト）があったが、屋敷神周辺へのハード面に立脚した注目が不足していると考えている。さらに近年の市街化によって地域へ表出していることを踏まえると、屋敷神とその周辺環境へのハード的視点、ここでは景観についての研究が必要であるといえる。

1・4 本研究の枠組み

しかし近年では屋敷神の存在が個人所有や地域コミュニティに限定されたものではなくなり、景観の一部として都市近郊のまちなみみにみられているため、地域への表出を減少としてとらえ

る必要が出てきたと考える。

そこで本研究では、対象地として選定した地域において、まちなかに屋敷神を対象として視認性とアクセス性の二つの観点（後述）から分析し、量的調査を行った。代表的な屋敷神を取り上げて、屋敷神と街路との位置関係に注目して、どのような景観が通行者にどのような影響を与えていているのかを考察した。

2. 対象地域

2-1 武蔵村山市の歴史的概要

武蔵村山市は古くは「村山郷」といい、狭山丘陵の南麓にあり、旧青梅街道以北にある古い歴史を持つ集落であるⁱⁱⁱ。道路は古くから発達し、以前は桑畠や果樹園など多くの農園がある農業の地域であった。1960年代の高度経済成長期に、市内の工場操業開始や、当時都内最大のマンモス団地である村山住宅ができるなど、市街化が進んでいった。現在では畠や果樹園が散見されるものの、ほとんどが宅地化している。

2-2 武蔵村山市の選定理由

武蔵村山市を本調査の対象とした理由に2つ挙げられる。まず、市街化が進行している割に屋敷神が今なお多く残存している点である。屋敷神が稻荷信仰とともに江戸近郊に広がったため、元来農業地域だった本市には屋敷神が多く建立されたと推察できる。それらは数は減ったと考えられるものの、市街化が進んだ今でも家々の間にみられ、地域ならではの景観を形成しているといえるに十分な屋敷神が観察できる。

次に、公的機関による詳細な調査報告があることだ。これは同地域において屋敷神が相当の注目をされるほど存在することを意味すると同時に、過去と比較するための資料にもなる。平成七年に出版された武蔵村山市教育委員会出版の『屋敷神集録』は、「むさしむらやま郷土の会」と武蔵村山市教育委員会職員が共同で武蔵村山市全域を対象とした屋敷神の網羅的な調査で、408もの屋敷神が記録された。

以上二つの理由から、武蔵村山市を対象とし、同市にある屋敷神を研究対象とした。

3. 武蔵村山市の屋敷神

武蔵村山市の屋敷神は、古くから集落があつた三ツ木、岸地区に集中している（図1）。特に青梅街道以北には、主に宅地利用されており、いまだ多くの稻荷や鳥居がみられるため、岸地区と三ツ木地区を本研究の実地調査の対象とし

た。実際に現在街路から見られる屋敷神をマッピングした。(図2)

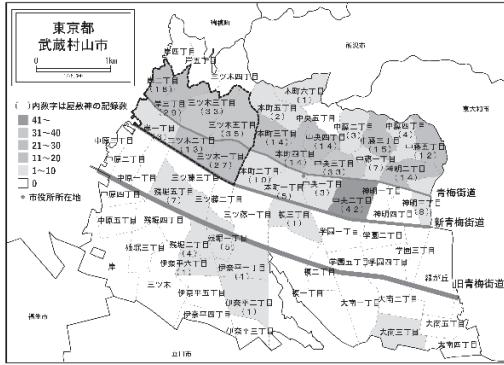


図1. 『屋敷神集録』をもとに作成

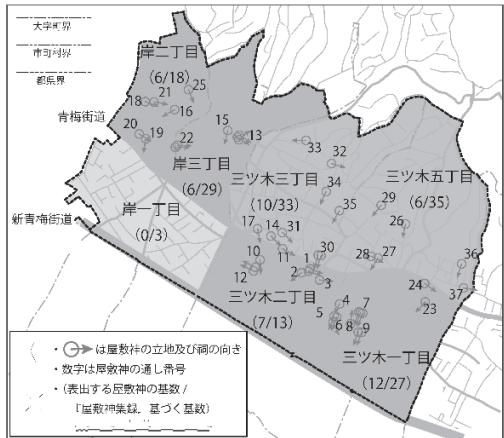


図2. 実地調査をもとに作成

4. 屋敷神の分類

4-1 調査報告 概観

上記図3において、当該地区に関して屋敷神が広く分布していることがわかる。また、岸地区より三ツ木地区の方が街路に表出している屋敷神の割合が高い。

また、屋敷神は屋敷の守護という性格のため、鬼門に向いていることが多いが、岸地区と三ツ木地区に関しては屋敷神（あるいは祠や鳥居）の方向に統一性はない。稲荷を祀ったものが大半であるのはこの地域が農業を中心とする地域であったからだろう。一つの敷地に複数の祠がある場合、異なる所有者の名があるものもあり

（図3の13番）、これは土地変化の中で本来は別の屋敷の屋敷神であったものが一つの敷地に合祀されたとも考えられる。

4-2 屋敷神の分類

岸地区と三ツ木地区にみられる屋敷神を①視

認性、②アクセス性の2観点から評価し、それぞれに影響する要素を書き出した。この2点にしたのは、研究目的に照らし合わせて、屋敷神がまちなかでどのような役割を持っているかを考察するために、歩行者との関わり方を「屋敷神をみつける」「屋敷神に物理的・心理的に近づく」の2段階に分けたためである。

屋敷神と景観の関係		街路からの視認性 高	街路からの視認性 低
敷地外	独立した敷地を持つ =アクセス性が高い	A (8)	a (1)
敷地内	囲みのない敷地内 =アクセス性は中間	B (11)	b (5)
	囲みのある敷地内 =アクセス性は低い	C (2)	c (6)

表1. 屋敷神の分類

以下より、屋敷神の6タイプについてそれぞれの特徴を分析する。視認性を構成する要素として色と樹木の有無、アクセス性を構成する要素として独立敷地かどうかと近隣施設、両方に影響する要素として街路との仕切り、公道からの距離、鳥居の有無を抽出し、それぞれ評価した。

4-2-1 A: 視認性が高く、アクセス性も高い

調査 日時	No	住所	代表的な写真	機器性		南北 道路との 仕切り	公道から の距離	鳥居	アセス性 位置
				色	樹木				
1月17日	3	三ツ木二丁目		白	有	無	近	有	独立敷地 民家
8月15日	19	岸二丁目		黒	無	無	近	無	独立敷地 墓地 民家 運動場 民家 空き地
1月22日	23	三ツ木一丁目		赤	有	無	近	有	独立敷地 山林 民家 登山道
1月22日	32	三ツ木三丁目		白 赤 緑	有	無	遠	有	独立敷地 山林
8月15日 13-i	13-i	岸三丁目		白 赤 緑	有	生垣	近	有	独立敷地 民家
1月22日 30-i 50-i	30-i 50-i	三ツ木三丁目		茶 白 灰	有	フェンス	近	無	独立敷地 駐車場
1月22日	34	三ツ木三丁目		白 緑	有	無	近	無	敷地内 口 幼稚園 民家

表2. タイプAの屋敷神

・ 視認性への影響

樹木があること。また樹木は存在感だけでなく色を加えるため、鳥居とのかけ合わせでさらに視認性の向上に貢献するといえる。

・ アクセス性への影響

敷居がないこと、公道から近い（あるいは隣接している）こと、独立敷地であることが、通行者にとって屋敷神に興味をもって近づくための心理的、物理的ハードルを下げ、アクセス性を高める。

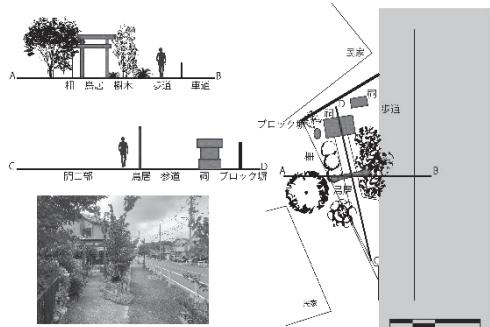


図3. タイプA-13

タイプAの特徴を表したものとして13番の屋敷神を例に挙げる。初夏にはアジサイをはじめとする植物が花を付け視認性に貢献する要素となっている。また、歩行者を隔てる生垣がありながら鳥居の角度も訪問者を受け入れやすい配置となっている。

4-2-2 B: 視認性が高く、アクセス性は中間

調査日時	No.	住所	代表的な写真	視認性			南方 道路との 仕切り 距離	敷地内での 位置	アクセス性 近隣施設
				色	樹木	有			
1月17日	1	三ツ木二丁目		白 緑	有	塀	近	無	敷地内入口 家・空地
1月17日	2	三ツ木二丁目		茶 青 緑	有	フェンス	遠	無	敷地内 空地(裏庭)
1月17日	8	三ツ木一丁目		赤 緑 黄	有	生垣	近	無	敷地内入口 民家
6月15日	14	岸三丁目		茶 灰	無	フェンス	近	無	敷地内 民家 倉庫
6月15日	15	岸三丁目		茶 赤 灰	無	その他	遠	無	独立敷地 山林 空き地
6月15日	18	岸二丁目		白 灰	有	無	近	無	敷地内 空き地 民家裏
6月15日	21	岸二丁目		白	有	塀	近	無	敷地内 民家
1月22日	29	三ツ木五丁目		茶 灰 緑	有	フェンス	近	有	独立敷地 民家 倉庫
1月22日	31	三ツ木三丁目		赤 茶	無	無	遠	有	敷地内 民家の空地
1月22日	37	三ツ木五丁目		赤	有	塀	近	有	敷地内入口 民家

表3. タイプBの屋敷神

・ 視認性への影響

Aに比較して樹木を有するものは少なく、木のボリュームも小さい傾向。

・ アクセス性への影響

Aに比較してアクセス性が劣る理由として道路との仕切りの存在が挙げられる。私有地内に立地することも特徴であるが、一方で街路からの距離は近く、また敷地内であっても入り口付近

のため、アクセス性の評価は中間となる。

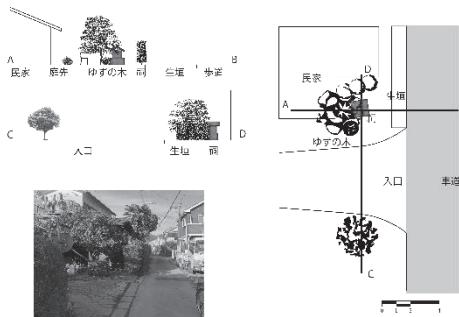


図4. タイプB-8

タイプBとして挙げるのは多くの屋敷神が集中している三ツ木地区にある屋敷神である。写真からわかるように、赤い祠と何より木に成った柚子が視界に入る。Aに比べれば庭の手入れはかなわないが、黄色い柚子の下の赤い祠があるという点では、彩があるといえる。また、この屋敷神も敷地内とはいえ、入り口近くにあり、かつその入り口も広くとられて閉鎖感は感じにくいため、アクセス性は中間といえる。

4-2-3 C: 視認性が高く、アクセス性は低い

調査日時	No.	住所	代表的な写真	視認性		南方 道路との 仕切り 距離	敷地内での 位置	アクセス性	
				色	樹木			有	無
1月17日	4	三ツ木一丁目		赤 緑 黄	有	塀	近	有	敷地内入り口 裏は自販機
1月22日	24	三ツ木一丁目		赤 緑 白	有	生垣	近	無	敷地内 民家

表4. タイプCの屋敷神

・ アクセス性への影響

視認性は同程度の評価であるが、特にアクセス性を下げたのは観察者のいる道路との明確な仕切りがあることである。仕切りがある場合、公道からの距離は影響せず、通行者にとって立ち入りが難しい。

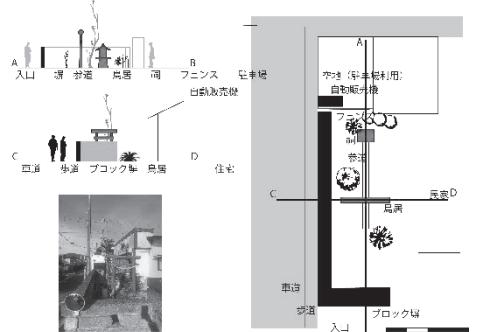


図5. タイプC-4

この屋敷神は塀から赤い鳥居がのぞき、ま

た交差点にあるため視認性は高い。向かいには小学校もあるので、多くの人がここを通る立地である。しかし、見えるだけではほとんどの人はさらにこの鳥居とその奥にある祠を覗くことはできない。鳥居と祠はブロック塀によってしっかりと囲われており、祠の裏側にあるフェンスも低木で隠されているため、家の所有であることが強調されている。

4-2-4 a：視認性が低く、アクセス性は高い

調査日時	No	住所	代表的な写真	視認性		両方			アクセス性	
				色	樹木	道路との仕切り	公道からの距離	鳥居	敷地内での位置	近隣施設
8月15日	20	岸二丁目		赤 灰	無	無	遠	無	独立敷地	墓地 民家 運動場

表5. タイプaの屋敷神

・視認性への影響

街路から奥まった位置にあり、通行人との間に仕切りなどはないが距離と間口の狭さが「仕切り」としての作用を果たしている。

・アクセス性への影響

独立敷地であり、さらに墓地等比較的公共背の高い施設が隣接していることが近づくための物理的心理的ハードルを低め、アクセス性を非常に高める。

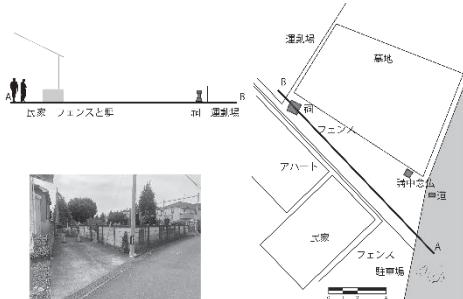


図6. タイプa-20

市境に近いこの祠は墓地、運動場、アパートに囲まれた細いわき道にある。公道に向かって遮るもののがなく一度見えてしまえば立ち寄ることは簡単だが、立地が奥まっていることに加え、祠周辺に木や鳥居ではなく、単体であることがより気づきにくい構造をしている。一方で片側が墓地であるため、両側とも民家によって囲まれた場合に比べて、奥まで踏み入る心理的ハードルは低い。

4-2-5 b：視認性が低く、アクセス性は中間

調査日時	No	住所	代表的な写真	視認性		両方			アクセス性	
				色	樹木	道路との仕切り	公道からの距離	鳥居	敷地内での位置	近隣施設
8月15日	20	岸二丁目		赤 灰	無	無	遠	無	独立敷地	墓地 民家 運動場
12月12日	6	三ツホ一丁目		灰色 緑	有	生垣	近	無	敷地内入口	小学校の向い
12月12日	9	三ツホ一丁目		赤茶	有	無	遠	無	敷地外	駐車場
12月26日	26	三ツホ五丁目		赤 緑	有	無	遠	無	独立敷地	駐車場
12月28日	28	三ツホ五丁目		赤 緑 茶	有	生垣	近	無	敷地内入口	民家
12月30日	36	三ツホ五丁目		茶 緑	有	無	遠	無	独立敷地	民家 畠

表6. タイプbの屋敷神

・視認性への影響

視認性が低い要因として樹木が挙げられる。Aと比較して樹木の配置が多く、茂っているため、親しみやすさよりむしろ祠を隠す作用が強まっていることが言える。

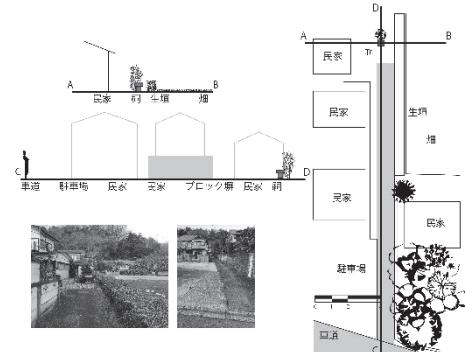


図7. タイプb-36

aタイプと類似性があるが、片側が墓地であったaと比較して、両側とも民家・畠に囲まれ、基本的に奥に住む住民のみが利用するアクセス道であるためアクセス性は高くない。一方で塀や樹木で囲まれているわけでもないので、アクセスすることが不可能ともいえないため、中間との分類を行った。

4-2-6

調査日時	No	住所	代表的な写真	視認性		両方			アクセス性	
				色	樹木	道路との仕切り	公道からの距離	鳥居	敷地内での位置	近隣施設
12月5日	5-i	三ツホ一丁目		茶 緑	有	塀	遠	無	敷地内	小学校の向い
12月5日	5-ii	三ツホ一丁目		茶 緑	有	生垣	近	無	敷地内	民家
12月12日	12-i	三ツホ二丁目		茶 白 (緑)	有	生垣	遠	無	敷地内	民家
12月12日	12-ii	三ツホ二丁目		茶 白 (緑)	有	フェンス	遠	無	敷地内	民家
12月16日	16	岸二丁目		茶 白 (緑)	有	生垣	近	無	敷地内	民家
12月22日	22-i	岸三丁目		茶 白 (緑)	有	フェンス	遠	無	敷地内	駐車場 小川
12月22日	22-ii	岸三丁目		茶 白 (緑)	有	フェンス	近	無	敷地内	田舎さん
12月25日	25-i	岸二丁目		茶 白 (緑)	有	フェンス	遠	無	敷地内	民家の畠
12月25日	25-ii	岸二丁目		茶 (緑)	有	フェンス	近	無	敷地内	民家の畠
12月27日	27	三ツホ五丁目		茶 (緑)	有	フェンス	遠	無	敷地内	民家の畠

表7. タイプcの屋敷神

・視認性への影響

樹木があることが視認性を低めている。夏は特に傾向が強まる。また、木も大きく、緑が深い傾向にある。

・アクセス性への影響

夏は特に樹木が茂るため、祠を隠す傾向が強まる。

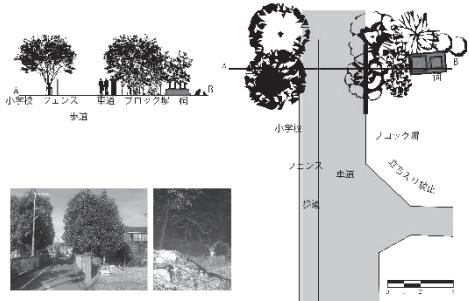


図 8. C-5

Cとして挙げる5番の屋敷神は視認性もアクセス性も優れない例である。木の下の隠された場所にあり、よく見ないと見つけることはできない。また祠の色も茶色であるため周囲と同化してしまっている。祠のある一角の茂みは立派だが、屋敷神への自然な「見える」が生まれにくく、冒頭で想定したような「それまで屋敷神がそこにあることを知らなかつた人」に対しては視認性が低い。また、屋敷神が見えた場合でも、手前の空き地には立ち入り禁止のチェーンが張られてしまい、中に入つて観察することは難しいためアクセス性は低い評価となった。

5. 考察と今後の展望

5-1 考察 屋敷神と景観

屋敷神は民間信仰等性格も相まって実に多様な信仰と建ち方をしているが、街路から観察できる屋敷神について視認性とアクセス性の2軸からその景観との関係を分析した。

屋敷神がまちなかに見えることが、景観に面白味を与え、またまち行く人にとってもまちを

認識するきっかけとなっているものがある。一方で、本来樹や小さくとも社によって隠される性質があるせいで、あえて祠と街路との間に植木をしている例もあった。屋敷神がみえて「しまう」一方で、見せたくない心理も働いているのではないかと推察できる。

5-2 今後の展望

本研究の限界としては3点あげられる。まず、分類に際しては考えられ得る指標を2つに限定したことが、一部の屋敷神がもたらす景観を過小評価している点である。屋敷神が持つ役割をより総合的に判断する指標を作る必要がある。

次に地元住民からみた屋敷神がもたらす景観を評価できていないことが挙げられる。あくまで街路からの視認性とアクセス性のみで評価したため、日々通行する人々にとって屋敷神がどのように認識されているかという点を取りこぼしていると考える。

また、これらの屋敷神がまちなかに流出した経緯についても、そこには所有者のどのような思い・狙いがあったのかをインバビューや個別調査を行う必要がある。特に今回研究対象としたのは街路から見える屋敷神のみであるが、現在見えていない屋敷神が平成七年と比較してどのような扱いになっているかを検討することも、今後屋敷神と市街化について研究する上で必要である。所有者の意思決定が何に影響され、土地や時代の変化とどんな関係があるのかといった原因の部分に踏み込めていないのが、本研究の不足点としてあげられる。

最後に、以上あげた3点に踏み込むことで、今後も表出が増えていくだろうと予測できる屋敷神が、どのように景観に引き続き影響を与える、またどのような影響が望ましいのかも考えるきっかけになるとを考えている。デザインの観点から、屋敷神を地域の景観の一部として考慮する利益と必要性があるのではないだろうか。

その他重要参考文献

- ・牧野真一「屋敷神信仰の地域性：小祠信仰研究再考」
- ・直江廣治「問題解説 屋敷神」 民間伝承 16(10) (173) 1952 p. 40
- ・柳田國男「祭日考」「氏神と氏子」 柳田國男全集 14, 1990, 筑摩書房
- ・直江廣治『屋敷神の研究』 日本信仰伝承論』 1977, 吉川弘文館
- ・佐々木勝『屋敷神の世界』 1983, 名著出版

ⁱ 鈴木榮太郎「屋敷神考」2023-1-23
https://www.jstage.jst.go.jp/article/minkenne_wseries/1/2/1_KJ00000935311/_article/-char/ja/

ⁱⁱ 特に関東において屋敷神は稻荷を祀ることが多く、稻荷信仰と関係が深い。

ⁱⁱⁱ 武藏村山市教育委員会『武藏村山 屋敷神集録』武藏村山市文化財資料集十三 1995